

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 22日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320092

研究課題名（和文） 近代移行期北東アジアにおける秩序構想の比較社会史

研究課題名（英文） Comparative History on the conceptions of social order in early modern Northeast Asia

研究代表者

山田 賢（YAMADA MASARU）

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：90230482

研究成果の概要（和文）：本研究においては、北東アジア（具体的には中国・朝鮮、そして日本を対象として想定している）の近代移行期における国民国家の形成について比較研究を行った。それぞれの地域の事例について文献調査を実施したほか、浙江工商大学日本文化研究所、武漢大学日本研究中心の研究者と共同研究会を開催して検討を行った。その結果、北東アジア各地域における国民国家は、それぞれの地域において育まれた近世伝統社会における社会関係を基体として出現したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aim of research project has been a comparative study on the emergence of nation-states in Northeast Asia(China,Korea,and Japan). For each case,we made literary research and held joint seminars with Zhejiang Gongshang University and Wuhan University. We insisted on nation-states in Northeast Asia were based on traditional relations in early modern societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011年度	2,700,000	810,000	3,510,000
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：比較歴史学・北東アジア・国民国家・秩序構想

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクト開始当初までの研究状況においては、ともすればアジア近代に出現した「国民国家」群が、あたかもヨーロッパの先行事例を複写して成立したかのような叙述が存在したことも否みがたい。しかし

ながら、結果的に北東アジアにおいても「国民国家」建設を目指す動向が共有されたのだとしても、その過程においては内部において多様な秩序構想がせめぎ合い、そのなかから「国民国家」という枠組が選び取られていったはずである。だとすれば、北東アジアにお

ける近世末期から近代への移行期は、ヨーロッパから持ち込まれた「国民国家」が移植される過程としてだけではなく、一面では、近世に内在する諸社会関係の展開の結果として、連続的に把握されるべきではないか。また、このような観点からの考察によって、「国民国家」成立とともに定着していく北東アジア諸地域のナショナリズムについても、その生成の原点に遡って検討することが可能となるのではないか。以上のような着想が本研究の出発における背景となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国大陸・朝鮮半島・日本列島を包摂する北東アジア諸地域を中心的な対象に据えつつ、近代移行期においてそれぞれの社会の内に胚胎された多様な秩序構想と、そのせめぎ合いの果てに「国民国家」とナショナリズムが生成されていく過程を比較史的に検討することにある。すなわち、本研究が目指すところは、「国民国家」とナショナリズムという近代の枠組みを、単に外在的な所与と考えるのではなく、近代移行期の基層社会の内側から育まれた秩序構想を汲み上げつつ成立した「生成」の観点から捉えようとする点にある。本研究はこのような問題意識のもとに、「秩序構想」というキーワードを設定して、北東アジア地域の近代移行期に関する比較と総合を目指したものである。

3. 研究の方法

本研究は、上記研究目的実現のために、基本的に以下の2つの方法を採用した。第1は、中国・朝鮮・日本における近代移行期の地域社会に出現した多様な秩序構想を実証的に考察し、そのような地域レベルの秩序構想と、国家レベルの秩序構想とを架橋することである。第2は、それぞれの地域に密着した実証研究を進めつつ、北東アジア近代移行期における「国民国家」の生成過程を比較史的な観点から記述するための〈総合〉を進めることである。以上の作業を通して、一国史的な歴史叙述の枠組を揺さぶり、北東アジア各地域の歴史を、「世界史」的な記述へと開いていくことも本研究の方法的特質である。

また、具体的な研究の遂行に当たっては、討議を通じた共同研究、国際研究集会等の開催を重視した。研究遂行期間の間に、南開大

学中国社会研究中心、浙江工商大学日本文化研究所、武漢大学日本研究中心等の研究組織と交流、共同研究会を実施した。

4. 研究成果

研究成果として明らかになったのは以下の諸点である。

1) とすればこれまでの研究史では、国民国家をいち早く形成して近代化した日本と、その形成が遅れた中国等他のアジア地域という対比モデルが語られる場合もあったが、そのような見方は成立しないということである。むしろ、それぞれの地域が抱えていた近世社会の前提条件と課題の相違ゆえに、同じように国民国家化が進められたにもかかわらず、その様相が異なって見えたに過ぎないと考えらるべきであろう。たとえば、中国の場合においても、血縁ネットワークとしての「宗族」、相互扶助を目的とした任意集団としての秘密結社など、近世社会の中で成熟していった社会的結合を基体として、近代国民国家への胎動が始まっていたことが明らかになった。

「宗族」について述べるならば、近世末期から近代にかけて、同姓集団同士がより遠い過去においては同一の祖先から枝分かれしていることを「発見」し、改めて一つの宗族に〈なっていく〉聯宗という現象が盛行する。このような聯宗の果てに、宗族における歴史の探求が、より遠い過去にまで次々に遡り、伝説的な古代の帝王「黄帝」にまで行き着いてしまえば、ただ一人の共通の祖先から誕生した一つの「中華民族」、そしてそのような「民族」に満たされた「中国」をそこから立ち上げることも可能になる。すなわち、一九世紀までの伝統社会内部に育まれた社会関係の成熟と、その広範な共有によって「近世化」が頂点に達したとき、その内側に「近代」＝国民国家が胚胎されたと見ることが出来る。すなわち、「国民国家」はただ外部からもたらされた異物が暴力的に定着させられたわけではなく、一面では内的産物として把握すべきなのである。

2) 近代移行期に至る前段階—近世北東アジアの比較史的考察についても、以下のようなモデルを仮説として提示した。一六世紀の東アジアは、潤沢な銀の流入とともに活発な商業化の時代を迎え、好況は人口爆発と未開発地域へ驀進する大開発を誘引していた。た

だし、人・モノ・貨幣の奔流のような流動化は、地域経済や政治秩序の安定的な持続にとっては激しい副作用をとまなうものでもあった。好況の一六世紀は、中国大陸ならばモンゴル・女真・倭寇などの周辺勢力の勃興と明清交替を、日本列島においては戦国時代を経験しており、同時に混乱の一六世紀でもあった。一七世紀までに東アジア各地域において登場、ないし再建された政治勢力—清朝、江戸幕府、朝鮮王朝—は、一六世紀の好況の反面であった過剰な流動性をコントロールし、安定的な秩序へと誘導することを共通の課題として出発したと見ることができる。

だが、中国大陸・朝鮮半島・日本列島、それぞれの地域の社会は、同じ条件のもとから、同じ課題を解決すべく出発したにもかかわらず、それぞれ異なった道をたどった。一七世紀の後半、朝鮮半島と日本列島では、当時の技術水準のもとで可能なレベルの開発が飽和状態に達するとともに、それまでの段階においてすでに相対的に過剰になっていた人口を、混乱を生じさせることなく社会全体で吸収していくための処方が必要となっていた。ここにおいて朝鮮半島・日本列島では、農業技術を環境に最適化するとともに、集約農法によって単位面積あたりの収穫量を増加させる方向性を選択することになる。

開発による量的拡大、それに伴う粗放な農法と「移住」の時代から、限られた農地を丹念に管理する集約的農法と「定住」の時代に移り変わっていけば、社会的結合の様態も変化していくことになるだろう。もはや拡大の可能性なき時代において、既に獲得した成果を永続的に守り継いでいくために、閉じたメンバーシップ＝血縁的紐帯に基づく社会的結合体が再構築されていく。朝鮮半島では地域的同族組織としての「門中」、日本列島では血縁に基礎を置く経営体としての「家」、そしてそれらを地縁的に集積した「村」という結合のかたちは、こうして一七世紀の後半以降、はっきりとした姿を現すことになる。

しかし中国大陸では、広大な隣接境界が地続きに広がっていたことと、銀流入の継続による好況の持続ゆえに、周辺開発・移住・人口増は止まることなく驀進し続けていた。したがって、清朝政府も人の移動がむしろ過剰人口による貧困の共有化という社会的リスクを減殺する限りにおいて、移動を容認、ないし放任していた。すなわち、清朝は流動的

な社会をある程度流動的なままに統御することを選択した、ないし選択せざるを得なかった。こうした〈安定した流動性〉の中で形成されていく中国の「伝統」社会は、おそらく朝鮮半島や日本列島で形成された近世の「伝統」とは異なった形態に帰着することになるだろう。こうして並行的な近世化を経験しながら、北東アジア各地域には、異なった条件が生成される。そしてこの事態がそれぞれの「国民国家」形成のプロセスと、近代化を規定していったと考えられる。

3) 本研究では、近世を通して土着化していった中国知が、むしろ近代国民国家の土壌の一つを用意した可能性を示唆し、近世から近代における連続性をより明示的に検証した。上述のように、中国・朝鮮・日本列島は、16世紀の世界的衝撃という同じ条件から出発しながら、しかも異なった社会体制を洗練させていった。従って、朝鮮、そして日本列島などとは異質な社会態勢と寄り添いつつ洗練されていった中華世界の世界像、知的体系をそのままのかたちで朝鮮半島・日本列島に持ち込んでしまえば、激しい不適合を発生させるだろう。つまり、中国の知に対しては、慎重に危険な因子を取り除き、大なり小なり環境に適合的な修正を加える〈土着化〉プロセスが不可欠なのである。この土着化プロセスは、近世における中国周辺世界—朝鮮半島・日本列島、そしてベトナムも—においておそらく並行的に発生していたと考えられる。そして、日本列島における儒教の受容は、まさにこうした中国知の「土着化」プロセスと並行的に進行した。つまり、近世化の時代を通して、儒教はつねに独自の再解釈を加えられつつ受容されていったのである。

通説的なイメージでは、日本の近代化とは、旧弊なる儒学から清新な洋学への転換であるように語られてきたのだが、むしろ近代化の論理の一部は、土着化した儒学(中国知)から汲み上げられていたのではないか、というのが本研究の提起する仮説である。

以上のように、本研究は中国・朝鮮・日本列島における近代移行期を比較検討した結果、いずれの地域においても16世紀から長期的に進行した再秩序化＝「近世化」の果てに、それぞれの近世に内在する条件に規定されながら並行的に近代国民国家の形成が開

始されたのではないかとする見通しを得ている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 21 件)

- ①山田賢「革命イデオロギーの遠い水脈」、中国一社会と文化一、26 号、32-49、2011、査読有
- ②山田賢「東アジアの近世—清代中国の秘密結社について—」、七隈史学、13 号、1-7、2011、査読無
- ③山田賢「日本近世における漢籍輸入と「経世」思想」、日本思想文化研究、2 卷 2 号、8-25、2009、査読有
- ④山田賢「戦乱と記憶—『仕隠齋涉筆』に見る清末社会—」、史朋、42 号、1-11、2009、査読無
- ⑤岩城高広「植民地文書からみた 19 世紀末のビルマ人地方有力者像」、人文研究 (千葉大学)、38 号、141-156、2009、査読無
- ⑥秋葉淳「オスマン帝国末期リビアにおける司法制度のオスマン化」、東洋学報、90 卷 2 号、27-54、2008、査読有

[学会発表] (計 12 件)

- ①山田賢「「善」と革命」、辛亥革命百周年記念国際会議、2011 年 12 月 4 日、東京大学
- ②山田賢「生成する地域・地域意識—清末中国の地方社会—」、歴史科学協議会、2011 年 11 月 27 日、立教大学
- ③山田賢「「善」と革命」、辛亥革命百周年記念国際会議、2011 年 12 月 4 日、東京大学
- ④山田賢「東アジアの近世—清代中国における人の移動と秘密結社—」、七隈史学会、2010 年 9 月 25 日、福岡大学
- ⑤山田賢「革命イデオロギーの遠い水源—清末の「救劫」思想をめぐって—」、中国社会科学学会、2010 年 7 月 10 日、東京大学
- ⑥山田賢「近代中国における「宗族」と地域秩序」、名古屋歴史科学研究会、2010 年 5 月 8 日、名古屋大学
- ⑦久留島浩「近世後期の地域社会と民衆運動」、アジア民衆史研究会、2008 年 11 月 29 日、明治大学
- ⑧山田賢「地域と記憶—従丁治党的《仕隠齋涉筆》看清末四川地方社会」、中国社会史学

会、2008 年 11 月 15 日、中山大学 (中国)

[図書] (計 14 件)

- ①趙景達他編、山田賢、久留島浩他共著『比較史的にみた近世日本』東京堂出版、2011 年、361
- ①深谷克己他編、山田賢、趙景達他共著『身分論をひろげる』、吉川弘文館、2011 年、100-153
- ②趙景達他編、趙景達、山田賢他共著『世界戦争と改造』、岩波書店、2010 年、1-40、184-202
- ③久留島浩・趙景達編『国民国家の比較史』、有志舎、2010 年、464
- ④安田常雄・趙景達編『近代日本の中の「韓国併合」』、東京堂出版、2010 年、266
- ⑤深谷克己編、山田賢他共著『東アジアの政治文化と近代』、有志舎、2009 年、38-57

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田賢 (YAMADA MASARU)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：90230482

(2) 研究分担者

久留島浩 (KURUSHIMA HIROSHI)
国立歴史民俗博物館・研究部歴史研究系・教授
研究者番号：30161772

岩城高広 (IWAKI TAKAHIRO)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：90312925

(3) 連携研究者

秋葉淳 (AKIBA JUN)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：00375601

趙景達 (CHO KYOENDAL)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：70188499

佐藤博信 (SATO HIRONOBU)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：60134342

菅原憲二 (SUGAHARA KENJI)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：00162850

安田浩 (YASUDA HIROSHI)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：40114219